

# 二人の父と四人の母

—芥川龍之介研究のために—

Two Fathers and Four Mothers : For Study of AKUTAGAWA RYUNOSUKE

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

はじめに

芥川龍之介の研究は、近年大幅に進展した。彼の原点である出生や生い立ちの問題にも、改めて調査の光が当てられるようになったのである。

そうした研究状況の中で、わたしは彼の「二人の父と四人の母」のことを、この辺で整理しておく必要を強く感じるようになった。それは前著『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、一九九九・三・二〇）の欠を補う作業ともなろう。研究は日進月歩である。今後新しい情報や資料の発見は続くはずだ。が、前著刊行後早くも四年半を経

ている。その間に出現した資料も多い。そこで、この時点でのまとめにも意味はあるものと思うのである。

「二人の父」とは、言うまでもなく実父新原敏三と養父芥川道章である。また、「四人の母」とは、実母新原フクと養母芥川儔、それに育ての母の芥川フキ、さらに実父の後妻新原フユ（義母）を含めてのことである。本論は芥川龍之介研究のための基本的調査の報告でもある。

## 二人の父

①新原敏三（第一の父、実父）

「二人の父と四人の母」の中、近年一番研究の進んだのは、第一

の父（実父）の新原敏三関係である。一九九八（平成一〇）年十月三十一日には、敏三の出身地山口県玖珂郡美和町で、同町教育委員会主催の「フォーラム本是山中人」が開催され、平岡敏夫・松本常彦・海老井英次・庄司達也・高橋龍夫らが意見を述べている。その報告集『フォーラム本是山中人——父の故郷で語ろう芥川龍之介の文学』（美和町教育委員会、一九九八・一一・一一）も刊行されている。これまでも実父新原敏三に関しては、森啓祐『芥川龍之介の父』（桜楓社、一九七四・二・五）や沖本常吉『芥川龍之介以前本是山中人』（東洋図書出版、一九七七・五・二〇）など、対象に賭けた優れた労作も存在した。そこで、それらも踏まえながら、新たな敏三像を探ってみよう。

龍之介の実父新原敏三は、山口県玖珂郡賀見畑村（現、美和町）生見の出身である。賀見畑村は山口県の辺境の地である。現在新幹線の新岩国駅は、在来線の岩国駅より七キロほど北に位置するが、そこからさらに北西に約二十キロ、交通の便は悪く、タクシード調に走っても四十分ほどかかる。わたしが最初訪れた時などは、運転手が道を間違え、五十分もかかった。まさに山奥の村である。龍之介が後年第一創作集『羅生門』の出版記念会の際、会場となったレストラン鴻の巣の主人の求めに応じて、「本是山中人愛説山中話」と書いたのも、自身の出生を意識してのことであろう。この山中の地、賀見畑村生見の寺院、浄土真宗の真教寺が新原家の菩提寺なのである。一九八八（昭和六三）年に当地の有志、および龍之介の三男也寸志と長男比呂志の妻瑠璃子（龍之介の姉ヒサの子、敏三の孫にも当たる）の手で、境内に立派な記念碑が建てられている。寺はやや開けた地の山側の裾にあり、近くに新原本家の屋敷跡もある。

新原本家は代々庄屋をつとめた由緒ある家柄であり、敏三の家は

この本家の流れを汲む分家であった。本家には藤原鎌足を祖とする「新原家正統系図」が伝えられているが、敏三の家がいつ分家したのかはわからない。新原本家の庄屋屋敷跡は、生見の志谷組に属する。右の沖本常吉『芥川龍之介以前本是山中人』によると、そこはやぶ屋敷と呼ばれ、屋敷の裏山には、今日もこんこんと湧き出る清浄な泉があるという。沖本は「昔の人が此処に屋敷を構えたのは、此処にこの泉がみつかったからであろう。この屋敷の立地条件はこの泉が決めてくれたものであろう」と記している。

新原敏三は一八五〇（嘉永三）年九月六日の生まれである。幕末の風雲急を告げる長州藩の出であることは、記憶に留めねばならない。後年の彼のドラマも、時代とその出身地とに深くかわるのである。敏三の父は新原常蔵、母の名は定かでない。長男としての出生であった。常蔵には敏三に続いてリノ・康太郎・元三郎が生まれる。が、常蔵は一八六二（文久二）年八月二十四日に没している。生年は定かでないものの、子どもの年齢からして、当時であっても早死の部類にはいる。敏三が十三歳のことである。新原家の家督は三男元三郎が継いでいる。家督を長男が継がず、なぜ三男が継いだかについて森啓祐は、先の『芥川龍之介の父』で「推測」としながらも、「長男敏三はいったん家督を相続したが、そのあと何等かの目的をもって出郷し、後年「壬申戸籍」編製の時点にたまたま敏三がこの地になかったため、やむなく元三郎が家督を相続したかたちにして届け出たものではなかったか」と記している。なお、次男の康太郎は紅床岩蔵の養子となった。また、後年敏三は、弟元三郎から家督相続のかたちで、戸主の座を取り戻すこととなる。それは一八七八（明治二）年十月二十日のことである。

敏三が家督を継ぐまでの日々は、平坦ではなかった。近年山口県立文書館所蔵の「毛利家文庫」の存在が明らかになるに及んで、一八六四（文久四）年から一八八〇（明治一三）年までの足跡を垣間見ることが可能となった。沖本常吉『芥川龍之介以前本是山中人』には、「毛利家文庫」を入念に調査した成果が示されている。敏三はこれまで満十二歳の頃、村の若者との喧嘩がもとで家出をしたとか、本家の子どもと喧嘩をして家を飛び出し、農兵隊に志願したとかされてきたが、近年地元研究者の間では、そういう理由のほかに維新前夜の時代的状況が、当時の貧しい農村の若者を駆ったのではないかとの考えが浮上している。平岡敏夫の「もうひとりの芥川龍之介——実父新原敏三の視点より——」（『フォーラム本是山中人』収録）にもこのことに言及した箇所がある。

敏三は十六歳になった一九六六（慶応二年、大林源治（源次）の変名で長州藩御盾隊の一員として四境戦争に出陣、幕府軍との芸州口・大野の戦いで重傷を負う。「毛利家文庫」にその記録が残されている。『フォーラム本是山中人』の巻末付録、美和町教育委員会編「芥川龍之介の実父新原敏三の生涯」と題した年譜には、敏三の出陣から負傷に至るまでが、諸資料を用いて、次のように記されている。

七月十三日三田尻を出発、十五日山陽路をのぼり国境を越え、芸州中津原（現、大竹市）へ。遊撃隊・衝撃隊とともに諸大隊に代わって大野・廿日市へ。訓練の成果を発揮し大活躍したが、七月末勢力を盛り返した幕軍は再び国境まで攻め返した。

七月二十七日、幕軍は長州軍の明石口（現、廿日市）を襲撃、

翌二十八日には小瀬川口（国境）を攻撃した。（『防長回天史』）

二十八日、御盾隊一番隊第五小队に属していた新原敏三（変名大林源治）が左足のかかどに貫通銃創を負った。（『芸州口戦争後記』）

敏三は不具者と認められる程の重傷により生業可能までの療養扶助を受けることになり、山口後河原の刀鍛冶藤本左門一宅で療養生活に入る。（中略）

この年十二月、四境戦の功労者リストアップが行われ、その中で戦功著しくしかも足に重傷を負ったということで、敏三の活躍に対して感謝表彰が決定した。十二月八日山口政治堂（藩庁）において、仲間十二人とともに感謝状を受ける。

なお、この時には、諸隊に加わって戦傷を負って不具となった者に対して扶持米の給付が生涯にわたって下付される事も、決定された。

新原敏三にとって、幕末の一八六六（慶応二年）という年が、いかに大きな意味を持っていたかは、右の記事から浮かんでくる。一八六八（明治元）年には、さらに一年分の生活費として米二石七斗が下賜され、翌年一八六九（明治二）年にも米二石五斗が下賜されていることも「毛利家文庫」の諸資料に見える。後年芥川龍之介が「紫山」（草稿）で、「幸ひにも純一無雑に江戸つ児の血ばかり受けた訳ではない。一半は維新の革命に参した長州人の血もまじつてゐる。（中略）彼の雄鶏おんどりよりもうぬ惚れと争闘性とに富んでゐるのはこの血の伝はつたおかげである」と書くのも、こうした実父敏三の背景と照らすと、よく分かる。

「毛利家文庫」の資料には、敏三がその後、長州藩のクーデターともいえる脱隊事件にかかわったことを知らせる資料がある。また、沖本常吉『芥川龍之介以前本是山人』の「長州藩の四境戦争」の章の「4脱隊騒動に巻き込まれる」が、敏三と事件とのかかわりを詳しく記している。一八六九（明治三）年十一月七日に新政府による常備軍創設という兵制改革にはじまる諸隊の反乱は、敏三をも巻き込んでいたのである。反乱は翌年二月に終わり、敏三はそれまでの恩賞の権利を没収されてしまう（のち、一八七四年に新救助米として復活）。騒動平定後の敏三は、帰順者の扱いを受け、しばらく萩に移り、一八七一（明治四）年大阪に造幣局が出来るに及び、そこで働くことになる。美和町教育委員会編「芥川龍之介の実父新原敏三の生涯」には、「時代の流れのなかで、当面兵役としての任務を終えた若者たちへの藩の対応も急務であり、こうした中で藩の指導もあり、新しい世界への夢と相まって大阪勤務を決断したと思われる。大阪造幣局が明治五年に設立されていることから、設立と同時に大阪入りしたと考えられる」と記している。

さて、新原敏三が上京するのは、一八七五（明治八）年の頃と思われる。文明開化の東京、そこは青雲の志に燃える敏三のあこがれの地であった。が、働く場は都会にはなく、沖本常吉の調査によると、一八七六（明治九）年六月、下総御料牧場に雇われ、一八八〇（明治一三）年四月まで働いている（『下総御料牧場沿革誌』による）。下総御料牧場は、現在の新東京国際空港の地、成田市三里塚にあった広大な牧場である。畜産が奨励された時代である。敏三はここに約四年間勤務し、牧畜業に精励したことになる。後年、耕牧舎という牛乳屋を営み、成功した敏三の牧畜業上の基礎は、この時代に養わ

れるのである。

一八八二（明治一五）年、三十二歳になった敏三は、明治の実業家渋沢栄一の経営する耕牧舎に勤めるようになる。彼が水を得た魚のように活躍するのは、渋沢と出会ったこの年以後のことだ。耕牧舎は当時箱根仙石原に牧場を開き、牛乳の販路拡大に努めていた。敏三は仙石原に一年ほどいて、すぐに東京に出、牛乳販売の管理者として、頭角を現すようになる。その辺りのことを沖本常吉の『芥川龍之介以前本是山人』に見ると、「敏三は仙石原の須永伝蔵・松村泰次郎の協力を得て、一挙に東京における耕牧舎の牛乳販売の責任者として、明治十六年には築地入舟町に本店を置き、東京府下北豊島郡金杉村（後の下谷区中根岸町）に支店を設け、更に芝・四谷と支店数を増やしていった」とある。敏三は当時外人居留地の一角にあった京橋区入船町に本店を置く牛乳販売店耕牧舎の支配人として、その経営に携わる。龍之介の生まれた頃には、各地に支店を置くようにもなり、経営は軌道に乗ってくる。一八九三（明治二六）年には、本店を芝区新銭座町十六番地に移し、やがてその土地・建物のほか、内藤新宿二丁目の八千坪の広大な牧場も七年の年賦で、経営権ともども渋沢栄一から譲り受けるのであった。一九一三（大正二）年二月二十六日付の弁済証書が残っている。

また、『牛乳の用法』（耕牧舎、一九〇四・一一・三）という宣伝パンフレットもある（山梨県立文学館蔵）。これを見ると、耕牧舎では牛乳のほかに、バター・クリームなども扱い、進物用切手を販売するなど、その積極的経営ぶりがうかがえる。新宿に牧場を持った頃には、宮内庁御用達の牛乳を生産するまでになる。龍之介が後年「点鬼簿」で、「僕の父は牛乳屋であり、小さい成功者の一人らしかつ

た」と回想する状況がここに訪れる。最盛期には築地精養軒や帝国ホテルや李王家などにも牛乳を納めたとは、龍之介の甥葛巻義敏の回想（「叔父芥川龍之介のことども」『世界』一九六一・二二）にある。

このような経歴からもわかるが、新原敏三は野人であり、幕末・明治初期の日本の動乱期をたくましく生きた男であった。「点鬼簿」には、「僕の父は又短気だつたから、度々誰とも喧嘩をした」とあるが、敏三は気が短く、一気に勝負をかける性格であったのだらう。それが時代に恵まれ、耕牧舎という牛乳販売業を大成させることにもなったのである。龍之介は実父の野性的な生き方や、短気ながら太っ腹な才覚にあこがれていたふしもある。が、近年の敏三研究の進展は、この人物の暗影にも目がむけられ、その「隠された私生活」（森啓祐「芥川龍之介の父」）にも光を当てるようになった。そして「敏三」という名の庶子の存在が、龍之介の生母発狂の原因という説が浮上するに及んだ。芥川龍之介という作家の悲劇は、一代にして成ったものではなかったことが、実父の歩みの検証から浮かび上がってくるのである。

敏三は芥川フクと結婚し、ハツ（ソメ）・ヒサ・龍之介の三児を得る。が、ハツは龍之介の生まれる前年に満五歳で夭折している。敏三はのちフクの妹フユとの間に得二という子を得る。龍之介の異母弟である。敏三は妻のフクが龍之介を生んで八か月ほどで精神に異常を来すと、龍之介をフクの実家芥川家に預け、その養育を依頼する。後に裁判を経て、龍之介は正式に芥川家の養子になるのだが、敏三は長ずるに及んで利発になる我が子への愛情を生涯捨てきれなかった。「点鬼簿」には、そうした敏三が次のように描かれている。

僕の父は幼い僕にかう云ふ珍らしいものを勧め、養家から僕を取り戻さうとした。

僕は一夜大森の魚榮でアイスクリームを勧められながら、露骨に実家へ逃げて来いと口説かれたことを覚えてゐる。僕の父はかう云ふ時には頗る巧言令色を弄した。が、生憎その勧誘は一度も効を奏さなかつた。それは僕が養家の父母を、——殊に伯母を愛してゐたからだつた。

敏三の事業は、時代の趨勢とともに下火になる。敏三は一九一九（大正八）年三月十六日、当時流行したスペイン風邪のため東京病院で死去した。満六十八歳であった。墓は谷中の墓地にある。新原家は龍之介の異母弟得二が家督を相続する。

## ②芥川道章（第二の父、養父）

芥川龍之介にとっての第二の父は、養父芥川道章である。芥川家は東京市本所区小泉町十五番（現、東京都墨田区両国三三三一一）に所在した。現在のJR両国駅東口から徒歩二分、国道十四号線（京葉道路）に出たところ、浅草橋方面に向かって右側の角地である。今はコンビニエンスストアのサンクスが営業をしている場所である。芥川家は代々幕府の御用部屋坊主をつとめた江戸時代から続く旧家であった。龍之介自身のち「澄江堂雜詠」（新潮）一九二五・六の「蠟梅」の項で、「今はただひと株の蠟梅のみぞ十六世の孫には伝はりたりける」と記して、自身を芥川十六世と数えている。

養父芥川道章は、はじめ長之輔、長嘉などと名乗っていたことが、残された資料からうかがえる。一八四九（嘉永二年）一月六日の生

まれである。龍之介を迎え入れた当時四十三歳、生母フクの十一歳年上の実兄である。維新の際は、神奈川府の警衛隊に所属し、のち東京府の土木課に勤務した。一八九八（明治三二）年五月、東京府内務部第五課長を最後に退職している。その後は小さい銀行の取締役に就いたとされるが、詳細は不明である。龍之介没後一年余の一九二八（昭和三）年六月二十七日、満七十九歳で没した。道章は一中節や囲碁、盆栽、俳句、篆刻などの趣味をもっていたことが知られている。特に一中節には凝って、宇治紫山を師匠に一家そろって稽古に励んでいた。沖本常吉の『芥川龍之介以前本是山中人』には、道章に関して、「いわゆる江戸の通人らしい趣があるといわれてもピンと来ない感じで、ただ『芥川文庫』という蔵書印の作者として篆刻という趣味を持ちあわしているところに親しみが持てた。又江戸っ子として矢張り役所勤をした人にはない垢抜けのしたところがあった」とある。

また、龍之介の長男比呂志と結婚し、芥川家に入った芥川瑠璃子の『影燈籠 芥川家の人々』（人文書院、一九九一・五・一〇）には、「道章は東京府の役人だったが趣味はひろく、家中で一中節を習ったり、俳句も嗜み、手先きお器用な人だったから、女学校を卒業したばかりで芥川に嫁に来た文に、新婚早々に立ち離まで作っておくっている。お客さま用のお膳も何膳か彫刻刀で拵えていて、いまでも損傷なくうちで使っている。飼っていたカナリア——捲き毛の、ローラ・カナリアといった——の籠が毀れかかったといって、縁側に大工道具を持ち出して直しているのを私と弟が傍にいてみていたことを覚えている」と回想するように、器用な人だったらしい。

恒藤恭の『旧友芥川龍之介』（朝日新聞社、一九四九・八・一〇）に

は、実父と養父とを比較した、次のような興味ある指摘が見られる。

実父の新原敏三氏には何回か会ったことがあるが、養父の道章氏とはまるで風格のちがつた人だった。道章氏はいかにも江戸の通人らしい趣のある、ゆつたりした人であつたけれど、敏三氏は着実な商人風の人でいくらか瘡の強さうに見える人だった。芥川は実父の敏三氏にあまり似てゐないで、むしろ伯父であり養父である道章氏に似てゐた。道章氏と敏三氏とは並んで話してゐるのを見ると、どうしても芥川が敏三氏の息子だとは思はれず、道章氏の実子だと思はれなくらゐであつた。芥川の容貌はそのやうに道章氏に似てゐたし、趣味などの上からいつても、道章氏と一致する所が多かつたが、争はれないもので、性格の点では、道章氏ののんびりした性質には似ないで、敏三氏の瘡の強さうな性質を多分に受けついだやうである。

恒藤恭は旧姓井川恭、島根県の松江市出身である。一高時代に芥川を知り、生涯交わりを訂した人として知られる。後年法哲学者として名を成し、京大教授や大阪市立大学学長を勤め、憲法擁護の立場から平和運動にも深く関わった人である。龍之介の一高時代、芥川家は内藤新宿二丁目の龍之介の実父敏三の経営する耕牧舎牧場脇の家に住んでいた。恒藤恭と芥川は一高の寮で同室であり、土曜日の午後や日曜日に、恒藤はよく新宿の芥川家を訪問、時には泊まることもあった。そうした中で右の文章なのである。

短い文章ながら新原敏三と芥川道章の風貌と人となり、浮かび上がるかのようなものである。

「芥川は実父の敏三氏にあまり似てゐないで、むしろ伯父であり養父である道章氏に似てゐた」というのは、芥川が母親似であることによるのであろう。道章は龍之介の母フクの兄なのだから伯父でもあり、血のつながりもあるのだから似ていて当然とも言える。また生後八か月から、龍之介は芥川家で育てられたのだから、拳措動作も自然に養父道章に似たことは十分推測できることだ。それにしても龍之介は体格・性格まで養父似であったとは、龍之介を知るものの期せずして言うことばである。

実父敏三は前述のように、龍之介が長ずるに及び利発なのを知り、取り戻そうとさまざまな方策を用いた。道章は預かった時点で龍之介を芥川家の養子とすることは織り込み済みと考えていたようである。が、龍之介をめぐっては、新原・芥川両家の間に、返せ、返さないの争いがあったのである。森啓祐の『芥川龍之介の父』には、「実父敏三と養父道章との間では、龍之介をめぐって「預けたのだから返せ」「返さぬ」の争いが繰り返され、最後には、道章は「たつてこの子連れ戻すと言ふならば、自分は腹を切つてしまふ」と拒絶したという」とある。結局、親族会議や東京地裁の裁判を経て、一九〇四（明治三七）年八月二十六日付で、龍之介は正式に芥川道章の養子となる。日本近代文学館には、龍之介の養子縁組證書や東京地方裁判所の判決謄本が保管されている。

道章は龍之介を妻傭、妹フキと共に心から愛した。道章は龍之介を誇りとし、毎年の賀状や引っ越し通知は、妻傭とではなく、必ず龍之介と連名で出すことに喜びを見出していた。龍之介は多分に伯父であり、養父となった芥川道章の影響を受けて育ったと言えるのである。

#### 四人の母

##### ①新原フク（第一の母、生母）

芥川龍之介には、前述のように四人の母がいた。まずは生母の新原フクである。フクは一八六〇（万延元）年九月八日、芥川俊清・ふでの四女として東京市本所区小泉町十五番地に生まれた。フクは男四人、女五人、計九人兄弟の一人として育った。龍之介の実家耕牧舎に勤務した室賀文武の回想「それからそれ」（『芥川龍之介全集月報』第四号、第五号、一九三五・二―三）によると、フクは「瘦形のすなりとした、美人型」で、「まだ病の発らなかつた前には、極く淑やかで、其に読書きも相当に出来さうな、一見誰が目にも、閨秀の面影が漂うて居た」という。

わたしの編集した『新潮日本文学アルバム芥川龍之介』（新潮社、一九八三・一〇・二〇）には、フクの写真が収めてある。その写真からもフクの恵まれた容貌は、伝わってくる。知的な美人の相である。ちなみに同じアルバムに見られるフクの妹フユも美しい。フユは龍之介の第四の母に当たる人である。龍之介の姿形は、これら芥川家の人々に近いのである。フクと新原敏三との結婚は、一八八三（明治一六）年十二月二十五日（戸籍への届け出は一八八五年三月二十六日）である。当時としては二人とも晩婚だったことになる。敏三とフクの間には、ハツ（ソメ）・ヒサ・龍之介の三児が生まれるが、長女ハツは、龍之介の生まれる前年の一八九一（明治二四）年四月五日、脳膜炎を患い、六歳の誕生日を待たずに亡くなっている。フクは龍之介を数え三十三歳の厄年に生んだ。夫の新原敏三は数え四十二歳であった。男の四十二歳と女の三十三歳を大厄といい、忌み嫌われたのである。そこで新原家では心ならずも旧来の俗習によって、龍

之介を捨て子にすることになり、耕牧舎の筋向かいのプロテスタント教会の門前に置かれた。形だけとはいえ、我が子を捨て子にしなければならなかった母フクの悲しみは、大きかった。形式的な拾い親は、松村浅次郎という耕牧舎関係（日暮里支店長）の人とされる。森啓祐の『芥川龍之介の父』によると、松村は渋沢栄一とかかわりがあり、新原敏三は松村の紹介で渋沢栄一を知ったのだという。

龍之介が生まれて三か月余の六月七日、母フクの二つ違いの兄芥川道徳が死んだ。病気がちなが絵を好んだ芸術家タイプの道徳は、フクの最も頼りにし、親しんでいた兄である。フクの気落ちはひどかった。兄道徳の死の五か月後、龍之介の生後八か月を目前にした十月二十五日、フクは突然精神に異常をきたし、発狂する。その背景には、兄の死のほか前年の長女ハツの死、厄年の龍之介の誕生、捨て子にした悲しみ、加えて葛巻義敏が「新しく興る事業家としての実父敏三が、かなりの放蕩をしたらしく、龍之介と同年の「庶子」のあることが伝えられている」（『日本文学アルバム 6 芥川龍之介』筑摩書房、一九五四・二二・一〇）と書くような状況があったのである。森啓祐は「敏二という名の弟」で、戸籍に見られる敏二という弟をフク以外の女性との間にできた子ではなかったかと推論する。そうした状況がフクの心痛となり、産後の肥立ちの悪さと重なって発狂に至ったと考えられるのである。

生母フクのことは、龍之介の「点鬼簿」（『改造』一九二六・一〇）に率直に描かれている。冒頭の一節には、次のようにある。

僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髪を櫛巻きにし、いつも芝の実家にと

つた一人坐りながら、長煙管ですばすば煙草を吸つてゐる。顔も小さければ体も小さい。その又顔はどう云ふ訳か、少しも生気のない灰色をしてゐる。僕はいつか西廂記を読み、土口気泥臭味の語に出合つた時に忽ち僕の母の顔を、——痩せ細つた横顔を思ひ出した。

「点鬼簿」によると、フクは芝区新銭座町の新原家で、二階の座敷牢のような部屋にいたらしい。「何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えていた」と龍之介は書いている。続いて彼女の死は、「病の為よりも衰弱の為に死んだのであらう」と推測されているように、世間から隔離され、運動もさせてもらえず、自然に衰弱し、フクは死ぬ。不幸な生涯がそこにあつた。没年月日は一九〇二（明治三五）年十一月二十八日である。龍之介満十歳の秋のことである。

## ②芥川儔（第二の母、養母）

芥川龍之介の第二の母とされるのは、むろん養家先の芥川道章の妻、芥川儔である。儔は一八五七（安政四）年四月十一日の生まれ。幕末・維新期の江戸の通人、細木香以の姪である。細木香以については、森鷗外の「細木香以」にくわしいが、江戸の俳諧師・狂歌師・役者・狂言作者・画家などと交わり、大通をもつて聞こえた人である。晩年は家産を蕩尽し、千葉の寒川に隠棲したという。

先の恒藤恭の『旧友芥川龍之介』には、儔を評して「至つて気だてのやさしい、よく物事に気のつく婦人で、いかにも人なつこい口調で淀みなく、もの柔かに話す人であつた」とある。恒藤は一高時



代は新宿の芥川の家、のちに芥川家が田端に転居すると、新築の家にしばしば泊まっている。その折りには何かと世話になったと言  
い、「新宿の家でも、田端の家でも、朝飯にはきつと生玉子が二つ  
とほうれん草のひたしと、短冊形の焼海苔四、五枚とが膳のうえに  
ならべてあつた」とも書いてある。

龍之介の初期作品に「孤独地獄」（『新思潮』一九一六・四）の冒頭  
に、「この話を自分から聞いた。母はそれを自分の大叔父から  
聞いたと云つてゐる。話の真偽は知らない」とあるが、ここでの  
「母」が傭であり、「大叔父」が細木香以である。また、「文学好き  
の家庭から」（『文章倶楽部』一九一八・一）の中では、「母は津藤の姪  
で、昔の話を沢山知つてゐます」とも語つてゐる。龍之介は一高時  
代に「椒図志異」という題をつけ、大学ノートに妖怪談を収集する  
が、中に「母より」と記したものがあつたが、それは傭から聞いた話  
である。

傭は写真で見ると背は低いものの、目鼻立ちのくつきりした美人  
である。芥川瑠璃子の『影燈籠 芥川家の人々』には、晩年の傭につ  
いて、「傭祖母は小柄だがまだ元氣もよく梅干しを漬けたり、台所  
の揚げ板の下に沢山しまつてあつた炭を出してきて、長火鉢や炬燵  
に埋め込んだり、忙しく立ち働いていたようだ。猫好きで雨戸に猫  
の出入りする猫穴が開けてあり、冬はよく猫を抱いて炬燵で居眠り  
したり、大好きなお相撲の放送をラジオで聴いていた」とある。ま  
た、「小さいばあちゃん、普段は口数もすくない人だつたが、う  
ちには烈しい性格を秘めていた」ともある。

傭は龍之介没後十年、一九三七（昭和一二）年五月十四日、子宮  
ガンで亡くなった。八十一歳であつた。病院に入院していたが、死

期が近づくに及び病院をいやがり、田端の自宅の龍之介の書齋であ  
つた部屋で、最後の幾日かを過ごしている。

### ③芥川フキ（第三の母、育ての母）

龍之介の第三の母で、育ての母となるのは芥川フキである。龍之  
介を乳飲み子の時から抱いて育て、成人するまで面倒をみたのは、  
芥川道章の妹で、龍之介の生母フクの姉であるフキなのである。龍  
之介にとっては伯母に当たる。芥川フキは一八五六（安政三）年八  
月二十九日の生まれなので、龍之介を迎えた時点ですでに二十七歳  
になつてゐた。人生四十年、あるいは五十年と言われた当時にあつ  
て、フキは初老の身で赤子を預かつたことになる。彼女は道章の妻  
の傭より一歳年上であつた。「文学好きの家庭から」（『文章倶楽部』  
一九一八・一）には、養父母にふれたのち、「その外に伯母が一人ゐ  
て、それが特に私の面倒を見てくれました。今でも見てくれてゐま  
す。家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で  
共通点の一番多いのもこの伯母です。伯母がゐなかつたら、今日の  
やうな私が出来たかどうかわかりません」と書いてゐる。

フキがどうして嫁に行かなかつたのかは推測の域を出ない。写真  
を見ると目が少しくぼみ、頬がこけている。姉のフクや妹のフユに  
較べると、容貌の点では数段劣る。芥川瑠璃子の『影燈籠 芥川家の  
人々』には、「幼い頃兄道章の持つた凧の先で目を傷つけて片目が  
不自由なせいか、一寸見には怖い顔にみえることがあり損をしてい  
たやうな気がする」とあるが、そういうこともあつてか、結婚には  
縁が薄かつたのであろう。

フキは乳飲み子の龍之介を「龍ちゃん」という愛称で呼び、我が

子のように慈しみ、愛情を籠めて育てた。芥川研究家の中には、フキの龍之介への愛を偏執狂的な愛情であったと否定的に見る向きもあるようだが、晩年はいざ知らず、養育中は決してそんなことはなかった。彼女は龍之介を甘やかすことなく、礼儀正しく育てたのである。後年芥川とつき合いのあった人々の多くが、その礼儀正しさを指摘することとなるが、それは育ての母である伯母フキの教育の賜物なのである。「僕は何かいたづらをする、必ず伯母につかまつては足の小指に灸をすえられた」とは、龍之介の後年の回想「追憶」〔文藝春秋〕一九二六・四二七・二〇の中の一節である。

芥川家でフキが龍之介を独占できたのは、独身で自由な時間が多かったことによるのである。彼女は道章の妻孀より年上でもあったから、家中ではかなり自由に振る舞っていた。そこで家事や道章の世話は孀、龍之介の養育はフキという分担制が自ずから形成されたのであろう。フキは牛乳を与え、添い寝をし、時には寢食を忘れて龍之介の養育に携わった。龍之介もこの育ての母であるフキを愛した。後年の龍之介との確執は、互いに愛するがゆえのこととした。教養があり、観劇を好み、一中節を愛するなど文学趣味をもっていたフキは、健全な婦人であった。彼女は教育に熱心で、龍之介に早くから文字や数を教えた。なにせはじめての子育てが、四十歳近くなつてのことだったので、若い母親のように、屋外で鬼ごっこやかくれんぼをする、走り回って遊ぶというのは無理であった。そのため幼子龍之介との遊びは、自然に家の中が多く、室内で本を読み聞かせたり、昔話や民話を話してやつたりすることになる。時には養母の偉も加わった。こうした室内遊びの中で、フキは龍之介に文字や数を無理強いではなく、遊びの中で覚え込ませたのである。龍之

介における文字や数の早期教育は、ごく自然に行われたのである。

フキの龍之介に対する文字や数の早期教育は、後年の作家芥川龍之介を考える時、大きな意味をもつ。早くから本のおもしろさを知り、あらゆる情報を本から得るといふ習慣は、プラスに作用した。作家芥川は古今東西の万巻の書籍を読み、創作の種本として生かすことがいかに多かったことか。彼の創作のほとんどの素材は、書物から得ているのである。自己の体験にのみ頼った同時代私小説作家との違いがここに生じる。また、本を早く読むという技術も、幼児という早い時期に文字を習得したこととかかわろう。後年の芥川家の主治医下島勲に「芥川君と読書の速度」〔芥川龍之介全集月報〕第2号、岩波書店、一九三四・一二二」といふ興味あるエッセイがあるが、そこで下島は龍之介の読書の速度が尋常でなかったことを語っている。

養家の本箱には、草双紙がいっぱい詰まっていた。幼い龍之介は、それにさっそく目を留め、読み出すこととなる。「僕はものの心のついた頃からこれ等の草双紙を愛してゐた。殊に「西遊記」を翻案した「金比羅利生記」を愛してゐた」とは、「追憶」の中の一節である。育ての母である伯母フキの見事な指導によって、早くから文字や数を習得していた龍之介は、確かに「もの心のついた頃から」書物に関心を示していたのであって、これは決して誇張した言い方ではない。芥川を天才とか秀才とかいう前に、育ての母である芥川フキの幼児教育にこそ、目をとめるべきなのである。

が、幼児期の文字や数の早期教育の陰には、マイナス面も潜んでいた。幼児期における同年齢児との交流や、いわゆるどろんこ遊びは、幼児期の龍之介には、きわめて少ない体験なのである。現代の幼児教育理論でも、幼児期には自然の中で体を動かしての遊びは、

極めて重視されているところでもある。フキの教育には、この点が欠落していた。無理もないことなのである。初老の婦人が初めての保育に携わったのだから、子育ては慎重にならざるを得ない。特に怪我の多い外遊びは、危険を伴うこともあって敬遠された。先に記したところだが、遊びは自然室内が多くなる。

後年龍之介が「追憶」その他で、ことさらに幼年時のいたずらを記すのは、そうした機会の少なかった反動なのである。養家近くの回向院を回想し、「僕は僕の友だちと一しよに度たびいたづらに石塔を倒し、寺男や坊さんに追ひかけられたものである」「(本所両国)」と龍之介は書くが、こうした悪戯の首謀者もむろん彼ではない。もしかするとこうしたグループには、加わっていなかったかも知れない。彼の生涯を通してのはにかみ屋の側面、人見知り、小心、生真面目さといった態度・性格は、幼年期の教育と決して無縁ではないのである。

育ての母となったフキは、教育にはとりわけ熱心であった。道徳教育から教科学習まで、彼女はしっかり教え込んだ。自身が教えるばかりか、小学校に入るや一中節の師匠宇治紫山の一人息子(大野勘二)に、英語と漢文と習字とを習わせた。後年の龍之介の進路も、こうした学習歴のうえに成り立っているのである。フキは龍之介の制作物や成績にはことのほか関心を示し、幼稚園時代の折り紙・刺繍の類からはじまり、小・中学校時代の習字や水彩画、国語・歴史・幾可の答案、さらには仲間との合作である回覧雑誌類まで、ありとあらゆるものを保存した。龍之介の成人後も大学ノートや手帳や原稿類はもとより、書き損じの反故原稿の保存にまで心を配った。それゆえにおびただしい量の未定稿や書き損じ用紙が残り、後世に

伝えられることとなった。

フキは一九三八(昭和一三)年八月四日、八十二歳の誕生日を目前にして亡くなった。芥川瑠璃子の『影燈籠 芥川家の人々』によると、「亡くなる前年頃、老人性のボケが始っていて、斎藤茂吉先生の往診をうけたりしていたが、老人性痴呆症という診断であった」とのことである。

#### ④新原フユ(第四の母、養母)

龍之介の第四の母は、実父新原敏三の後妻となった新原フユである。フユは芥川道章の妹で、龍之介の実母フクの妹に当たる。龍之介から言うなら叔母でもあるのだ。フユは姉フキの発狂で、当初人手を必要とした新原家に手伝いに行っていたが、やがて敏三とかかわりができ、一八九九(明治三二)年七月十一日に、敏三との子、得二を出産する。未だ敏三の妻フクは、同家の二階で療養中のことである。これは芥川家、新原家にとって一大事件であった。妻ある男がよりによって妻の妹に子を産ませるとは、新原家にとってはもちろん、旧家芥川家の名折れであったことも確かである。

フユは一八六二(文久三)年一〇月九日の生まれである。龍之介の生母フクの二歳年下になる。写真が残っているが、顔立ちの整ったなかなかの美人である。当時彼女は三十歳になっていた。婚期を過ぎていたこともあって、芥川家では姉の婚家先の困難を見かねて手伝いに出したのであった。牛乳販売業の仕事は忙しかった。そのうえ四つになったばかりの女の子(ヒサ)もいた。親戚の応援はどうしても必要だったのである。が、フユを新原家に行かせたのは、道章の誤りであったようだ。敏三は男盛りであり、妻の面影を宿す

フユが自身の近くにいて、家事手伝いをしていとなると、間違いは避けられない道行きであったのだ。

敏三の妻フクは、頭がおかしくなっていたというものの依然存命中であり、敏三とフユとの結婚は法律上成り立たないので、二人の間に出来た子は、敏三とフクの次男として届けられた。当時龍之介は七歳になっており、江東尋常小学校二年生に在学していた。得二は父敏三に容貌も性格も似ており、龍之介とは肌が合わなかった。彼は後年の龍之介にとつて、何かとやかいな存在となる。「或阿呆の一生」の「三十二喧嘩」の章には、次のようにある。

彼は彼の異母弟と取り組み合ひの喧嘩をした。彼の弟は彼の為に圧迫を受け易いのに違ひなかつた。同時に又彼も彼の弟の為に自由を失つてゐるのに違ひなかつた。彼の親戚は彼の弟に「彼を見慣へ」と言ひつづけてゐた。しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだつた。彼等は取り組み合つたまま、とうとう縁先へ転じて行つた。縁先の庭には百日紅が一本、——彼は未だに覚えてゐる。——雨を持つた空の下に赤光りに花を盛り上げてゐた。

得二は父新原敏三譲りの激しい性格を持った野性的な人物となる。が、探求心に富んだ純粹な人であつたようだ。上智大学を中退し、後は独学で勉学に励み、兄龍之介を越えようと、ひたすら努力した。龍之介後半生の友、小穴隆一は得二について「新原は兄芥川を愛惜すると同時に、遺書をもつて義絶を計つたその兄芥川を金輪際認めはしなかつた」(二つの絵芥川龍之介自殺の真相)『中央公論』

一九三二・二(一九三三・二)と書いている。新原得二に関する唯一の文献に、北川桃雄「芥川さんの弟」(『芥川龍之介全集月報』第三号、一九三五・二)がある。それによると得二は、「十九歳にして最初に最後の小説『鰻』を書き、後に岡本綺堂門に入つて戯曲『虚無の果』を発表し、それらは何れも十分将来を想はせるに足るものであつたが、彼の内の激しい其同じ情熱は彼を駆つて宗教——日蓮宗に走らせてしまつた。その又信仰といふのが、たゞの信心といふより Fanaticism といふにふさはしかつた。家業も創作も捨ててそれこそ一心に打ち込んだ」とある。得二の死は、龍之介の没後三年の一九三〇(昭和五)年二月十八日のことである。

龍之介は義母フユを叔母と呼んでいた。小学校時代の「暑中休暇中の日誌」にもそう書いている。芥川家の儒(ま)を母と呼んでいたのだから当然のことである。ちなみに実父敏三も龍之介にとっては叔父の存在であつた。フユは一九一〇(大正九)年四月二十一日に腹膜炎を患い身罷つた。龍之介二十八歳の年のことであつた。

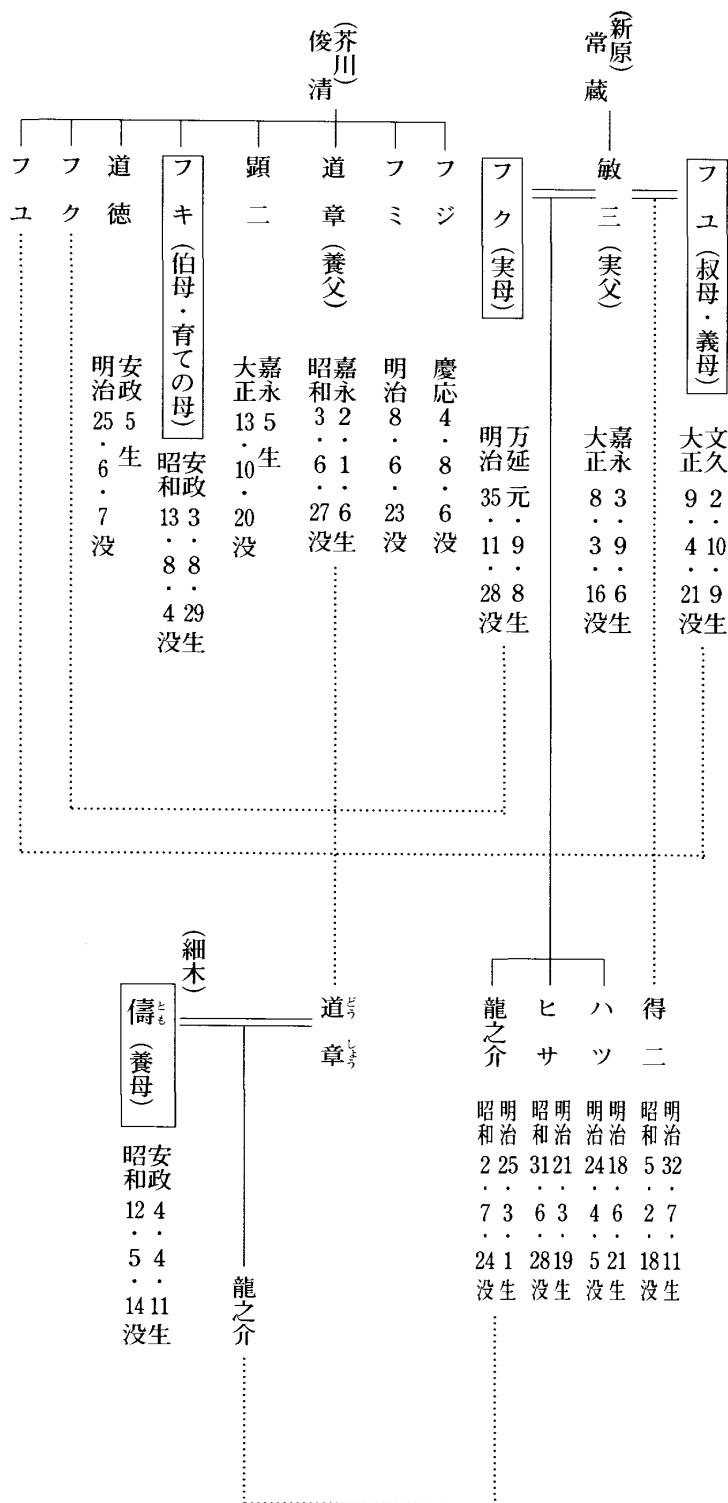
### むすび

二人の父と四人の母を持つた龍之介は、生涯その係累に悩まされることとなる。子どもを養子に出すと、その子の将来を慮つて、両家は交際を絶つのが普通である。が、芥川家と新原家は、交際を絶つどころか、親しい交わりを続けているのである。当初は預けるかたちで龍之介を芥川へ送つたのが、曖昧さを生んだのであろうか。龍之介は芥川家に勉強部屋を持っていたばかりか、芝新銭座町の新原家にも勉強部屋をもち、双方を行き来しているのである。わたしの調査ではっきりしたことだが、龍之介が東京府立第三中学校入学

に際しての保証人も、何と芥川道章と新原敏三の二人の名が記されているのである。

さらに後年龍之介が塚本文と結婚式をあげた朝、東京田端の芥川家の玄関先で写した写真に注目したい。『新潮日本文学アルバム芥川龍之介』の三十二ページに収録された写真なので参照していただきたい。

資料 龍之介の「二人の父と四人の母」の系図



い。そこには二人の父とフクを除いた三人の母とが写っている。この一枚の写真からも龍之介の複雑な生い立ちが、さらに言うならば「家」の重荷がうかがえる。そのほか実姉ヒサ、腹違いの弟得二、ヒサの前夫との子、葛巻義敏らの係累が、彼をいかに縛ったことか。芥川龍之介の生涯は彼らとの闘いでもあったのだ。